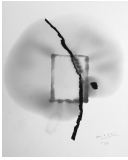

表紙
小林英樹 《赤、黒のマジックインクとポピーオイルの出合い》
木炭、樹脂、マジックインク、ポピーオイル
1983 年

表紙絵の解説

小　林　英　樹

1983 年は、DEEDS of CORORS（何も作ろうとしない、行為としての表現）の始まりの年だった。ぼくはドローイングをたくさんした。簡単な方法論を決め、それ以外の要素は持ち込まず、あらかじめ枚数を決めてそれが終わるまでひたすら繰り返す。大阪の受験予備校の講師であった時代だから、帰宅後、毎日、単純なことを繰り返したが、それが意外な充実感を生んでくれた。何か、作りだそうと必死だった過去を振り返りながら、ぼくは自由を感じた。制作時の思考の停止は、必ずしも表現に対する思考の停止と同じではないが、DEEDS of CORORS は、自分が常日頃在るところから出てくる自然な要求や衝動から始まる。

たとえば、原稿用紙（鳩居堂製）100 枚に、修正液で点を打ち、全部終わったら、それに別の原稿用紙を重ね、その上からフロッタージュする。紙の下に 10 円玉を置き、それを鉛筆で擦ると図柄が浮き上がって見えてくる。あの手法である。第 1 室目に白い点々を打った原稿用紙が並び、次室にはそれらをフロッタージュした原稿用紙が並ぶ。そこにどんな意味が付加されるのか、作者であるぼくはあえて何も考えず、提示もしない。

今回の表紙の作品は、分厚い画用紙に乾性油の浸潤の軌跡を残す、それをテーマにした。油の酸化が紙の繊維に悪影響を及ぼし、黄焼けし、紙がぼろぼろになる、そんなイメージがあるが、実際、ぼくの 50 年近くの経験では、繊維の丈夫な紙であれば、黄変、褐色変は免れないにしても、経年劣化ではなく、経年変化として受容できるものであることが多い。この図版も去年撮ったものであるが、乾性油は酸化が終了した時点で紙に染み込んだまま固着してくれている。そして、変化は完全乾燥した時点でストップする。

マジックインクは油性で微粒子の染料を使用しているから、色が紙の上に置いた油の浸潤に沿って広がっていく。その行方や表情は、空の雲を見ているようで、おおよその予測はついてもどうなるかわからない。画用紙の繊維、浸潤する乾性油、そこに引かれたシンナーに混入された赤と黒の染料の線、紙は水平面に置かれているが、室内には微妙な温度差や空気の動きなどがあり、諸々の力学的要素を反映しながら模様ができていく。ポピーオイルの指触乾燥に 10 日くらいは必要だから、その間は、画仙紙を間に挟み、そっと重ねて置く。この作品は、札幌に移動して、しばらくして、100 枚固めて並べて展示した。